

ヴィヨンの妻

太宰 治

新潮文庫

ヴィヨンの妻

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

昭和二十五年十二月二十日 発行
昭和四十四年十一月十五日 三十刷改版
昭和四十五年五月二十日 三十一刷

著 者 太 宰 治

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇二二一
振替東京八〇八番

落丁のものは本社又はお買求
店にてお取替えいたします。

Ⓔ 印刷・東洋印刷株式会社

© Michiko Tsushima 1950

Printed in Japan

新 潮 文 庫

ヴ ィ ヨ ン の 妻

太 社 治 著



新 潮 社 版

目次

親友交歓	七
トカトントン	三五
父	七
母	七
ヴィヨンの妻	九
おさん	二九
家庭の幸福	二九
桜桃	二五

解説 亀井勝一郎

ヴィ
ヨ
ン
の
妻

親
友
交
歡

昭和二十一年の九月のはじめに、私は、或る男の訪問を受けた。

この事件は、ほとんど全く、ロマンチックではないし、また、いっとうに、ジャアナリスチックでも無いのであるが、しかし、私の胸に於いて、私の死ぬるまで消し難い痕跡を残すのであるまいか、と思われる、そのような妙に、やりきれない事件なのである。

事件。

しかし、やっぱり、事件といつては大袈裟かも知れない。私は或る男と一人で酒を飲み、別段、喧嘩も何も無く、そうして少くとも外見に於いては和氣霽々裡に別れたというだけの出来事なのである。それでも、私にはどうしても、ゆるがせに出来ぬ重大事のような気がしてならぬのである。

とにかくそれは、見事な男であつた。あつぱれな奴であつた。好いところが一つもみじんも無かつた。

私は昨年罹災して、この津軽の生家に避難して来て、ほとんど毎日、神妙らしく奥の部屋に閉じこもり、時たまこの地方の何々文化会とか、何々同志会とかいうところから講演しに來い、または、座談会に出席せよなどと言われる事があつても、「他にもっと適当な講師がたくさんいる筈です。」と答えて断り、こつそりひとりで寝酒など飲んで寝る、というやや質隠者のあけくれ

にも似たる生活をしているのだけれども、それ以前の十五年間の東京生活に於いては、最下等の居酒屋に出入りして最下等の酒を飲み、所謂最下等の人物たちと語り合っていたものであって、たいていの無頼漢には驚かなくなっているのである。しかし、あの男には呆れた。とにかく、ずば抜けていやがった。

九月のはじめ、私は昼食をすませて、母屋の常居という部屋で、ひとりぼんやり煙草を吸っていたら、野良着姿の大きな親爺が玄関のたたきにつそり立って、

「やあ。」と言った。

それがすなわち、問題の「親友」であつたのである。

（私はこの手記に於いて、ひとりの農夫の姿を描き、かれの嫌悪すべき性格を世人に披露し、以て階級闘争に於ける所謂「反動勢力」に応援せんとする意図などは、全く無いのだという事を、ばからしいけど、念のために言い添えて置きたい。それはこの手記のおしまいまでお読みになったら、たいていの読者には自明の事で、こんな断り書きは興覚めに違いないのであるが、ちかごろ甚だ頭の悪い、無感覚の者が、しきりに何やら古くさい事を言つて騒ぎ立て、とんでもない結論を投げてよこしたりするので、その頭の古くて悪い（いや、かえつて利口なのかも知れないが）その人たちのために一言、言わでもの説明を附け加えさせていただく次第なのだ。どだい、この手記にあらわれる彼は、百姓のような姿をしているけれども、決してあの「イデオロギスト」たちの敬愛的たる農夫では無い。彼は実に複雑な男であつた。とにかく私は、あんな男

は、はじめて見た。不可解といつてもいいくらいであった。私はそこに、人間の新しいタイプをさえ予感した。善い悪いという道徳的な審判を私はそれに対して試みようとしているのではなく、そのような新しいタイプの予感を、読者に提供し得たならば、それで私は満足なのである。」

彼は私と小学校時代の同級生であつたところの平田だという。

「忘れたか。」と言つて、白い歯を出して笑っている。その顔には、幽かすかに見覚えがあつた。

「知っている。あがらないか。」私はその日、彼に対してたしかに軽薄な社交家であつた。

彼は藁草履わらそうりを脱いで、常居じよういにあがつた。

「久しぶりだなあ。」と彼は大声で言う。「何年振りだ？ いや、何十年振りだ？ おい、二十何年振りだよ。お前がこつちに来ていたという事は、前から聞いていたが、なかなか俺おれも畑仕事がいそがしくてな、遊びに來れないでいたのだよ。お前もなかなかの酒飲みになつたそうじゃないか。うわははははは。」

私は苦笑し、お茶を注いで出した。

「お前は俺と喧嘩した事を忘れたか？ しょっちゅう喧嘩をしたものだ。」

「そうだったかな。」

「そうだったかなじゃない。これ見ろ、この手の甲に傷がある。これはお前にひつかかれた傷だ。」

私はその差し伸べられた手の甲を熟視したが、それらしい傷跡はどこにも無かつた。

「お前の左の向う脛すねにも、たしかに傷がある筈だ。あるだろう？ たしかにある筈だよ。それは俺がお前に石をぶつつけた時の傷だ。いや、よくお前とは喧嘩をしたものだ。」

しかし、私の左の向う脛にも、また、右の向う脛にも、そんな傷は一つも無いのである。私はただあいまいに微笑して、かれの話を傾聴していた。

「ところで、お前に一つ相談があるんだがな。クラス会だ。どうだ、いやか。大いに飲もうじやないか。出席者が十人として、酒を二斗、これは俺が集める。」

「それは悪くないけど、二斗はすこし多くないか。」

「いや、多くない。ひとりに二升無くては面白くない。」

「しかし、二斗なんてお酒が集まるか？」

「集まらない、かも知れん。わからないが、やってみる。心配するな。しかし、いくら田舎いなかだつてこの頃は酒も安くはないんだから、お前にそこは頼む。」

私は心得顔で立ち上り、奥の部屋へ行つて大きい紙幣を五枚持つて来て、

「それじゃ、さきにこれだけあずかつて置いてくれ。あとはまた、あとで。」

「待ってくれ。」とその紙幣を私に押し戻し、「それは違う。きょうは俺は金をもらいに来たのではない。ただ相談に来たのだ。お前の意見を聞きに来たのだ。どうせそれあ、お前からは、千円くらいは出してもらわないといけない事になるだろうが、しかし、きょうは相談かたがた、昔の親友の顔を見たくて来たのだ。まあ、いいから、俺にまかせて、そんな金なんか、ひっこめてく

れ。」

「そうか。」私は、紙幣を上^{うわぎ}衣のポケットに収めた。

「酒は無いのか。」と突然かれは言った。

私はさすがに、かれの顔を見直した。かれも、一瞬、工合いの悪そうな、まぶしそうな顔をしたが、しかし、つっぱった。

「お前のところには、いつでも二升や三升は、あると聞いているんだ。飲ませろ。かかは、いないのか。かかのお酌で一ぱい飲ませろ。」

私は立ち上り、

「よし。じゃ、こっちへ来い。」

つまらない思いであつた。

私は彼を奥の書斎に案内した。

「散らかっているぜ。」

「いや、かまわない。文学者の部屋というのは、みんなこんなものだ。俺も東京にいた頃、いろんな文学者と附合いがあつたからな。」

しかし、私にはとてもそれは信じられなかった。

「やっぱり、でも、いい部屋だな。さすがに、立派な普請だ。庭の眺めもいい。柵^{ひいらぎ}があるな。柵のいわれを知っているか。」

「知らない。」

「知らないのか？」と得意になり、「そのいわれは、大にして世界的、小にしては家庭、またお前たちの書く材料になる。」

さっぱり言葉が、意味をなして居らぬ。足りないのではないか、とさえ思われた。しかし、そうではなかった。なかなか、ずるくて達者な一面も、あとで見せてくれたのである。

「なんだろうね、そのいわれは。」

にやりと笑って、

「こんど教える。柊のいわれ。」ともったい振る。

私は押入れから、半分ほどはいつているウイスキーの角瓶かくびんを持ち出し、

「ウイスキーだけど、かまわないか。」

「いいとも、かかがいないか。お酌をさせろよ。」

永い間、東京に住み、いろんな客を迎えたけれども、私に対してこんな事を言った客は、ひとりも無かった。

「女房は、いない。」と私は嘘うそを言った。

「そう言わずに、」と彼は、私の言う事などてんで問題にせず、「ここへ呼んで来て、お酌をさせろよ。お前のかかのお酌で一ぱい飲んでみたくてやって来たのだ。」

都会の女、あか抜けて愛嬌あいぎょうのいい女、そんなのを期待して来たのなら、彼にもお気の毒だ

し、女房もみじめだと思った。女房は、都会の女ではあるが、頗る野暮すこぶったい不器量の、そうして何のおあいそも無い女である。私は女房を出すのは気が重かった。

「いいじゃないか。女房のお酌だと、かえって酒がまずくなるよ。このウイスキーは、」と言いながら机の上の茶呑茶碗ちやのみちやわんにウイスキーを注ぎ、「昔なら三流品なんだけど、でも、メチルではないから。」

彼はぐつと一息に飲みほし、それからちよつちよつと舌打ちをして、

「まむし焼酎しょうちゆうに似ている。」と言った。

私はさらにまた注いでやりながら、

「でも、あんまりぐいぐいやると、あとで一時に酔いが出て来て、苦しくなるよ。」

「へえ？ おかど違いでしょう。俺は東京でサントリイを二本あけた事だつてあるのだ。このウイスキーは、そうだな、六〇パーセントくらいかな？ まあ、普通だ。たいして強くない。」と言つて、またぐいと飲みほす。なんの風情ふぜいも無い。

そうしてこんどは、彼が私に注いでくれて、それからまた彼自身の茶碗にもなみなみと一ぱい注いで、

「もう無い。」と言った。

「ああ、そう。」と私は上品なる社交家の如くごと、心得顔に気軽そうに立ち、またもや押入れからウイスキーを一本取り出し、栓せんをあける。

彼は平然と首肯して、また飲む。

さすがに私も、少しいまいしくなつて来た。私には幼少の頃から浪費の悪癖があり、ものを惜しむという感覚は、（決して自慢にならぬ事だが）普通の人に較べてやや鈍いように思っている。けれども、そのウイスキーは、謂わば私の秘蔵のものであつたのである。昔なら三流品でも、しかし、いまではたしかに一流品に違ひなかつたのである。値段も大いに高いけれども、しかし、それよりも、之を求める手蔓が、たいへんだつたのである。お金さえ出せば買えるというものでは無かつたのである。私はこのウイスキーを、かなり前にやつと一ダアスゆづつてもらい、そのために破産したけれども後悔はせず、ちびちび嘗めて楽しみ、お酒の好きな作家の井伏さんなんかやつて来たら飲んでもらおうとかなり大事にしていたのである。しかし、だんだん無くなつて、その時には、押入れに、二本半しか残っていなかつたのである。

飲ませろ、と言われた時には、あいにく日本酒も何も無かつたので、その残り少なの秘蔵のウイスキーを出したのであるが、しかし、こんなにかぶがぶ鯨飲されるとは思っていなかつた。甚だケチ臭い愚痴を言うようだが、（いや、はつきり言おう。私はこのウイスキーに関しては、ケチである。惜しいのである）まるで何か当然の事のように、大威張りでぐいぐい飲まれては、さすがに、いまいましい気が起らざるを得なかつたのである。

それにまた、彼の談話たるや、すこしも私の共感をそそってはくれないのである。それは何も私が教養ある上品な人物で相手は無学な田舎親爺だからというわけではなかつた。そんな事は、